遂翁說法

全

特67
383

019563-000-9

特67-383

遂翁和尚說法

土屋　善兵衛／編

M18. 9

ABG-0337

特67
383

善説法 全

土屋善兵衛編輯

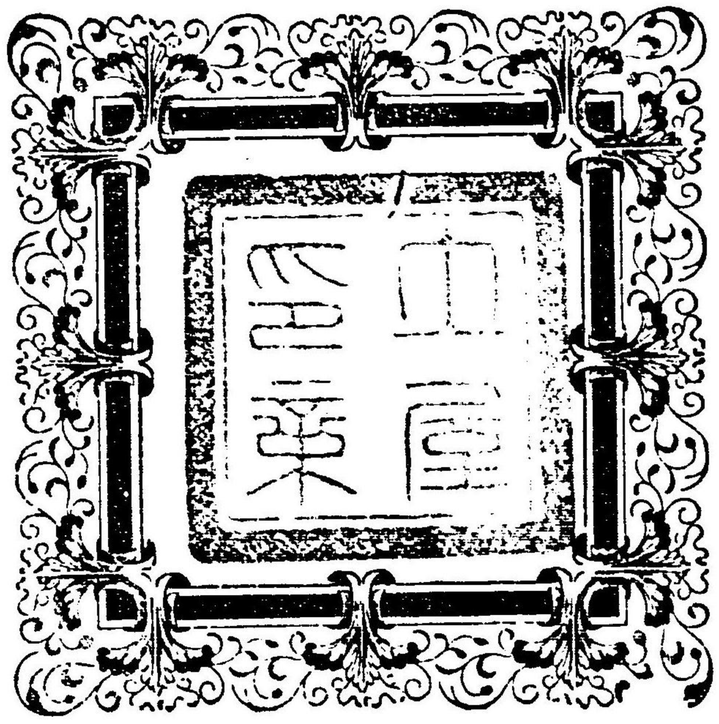
明治十八年九月出板

明治十八年十月三日内務省賜付

東京圖書館藏

翁和尚說法

遂に是は大々在家の衆、大勢言合せて能く御座つた奇特な事でをちやる、さて此大會と言ふ者は、此ように御歴々を大勢集めて、見る通り洗湯屋の亭主のように、をらは高い處へ上つて世話をやへても、聞へ兼るであろう、其聞へぬ所が難有ひぞよ、此所來て皆のものが、そうしやんとして居る時はどうおたものおや、れらは男だとも、女だとも、武士だ共、町人だ共、器量がよい共、惡い共、善惡の心はないきよろりと



ゐて、れらが顔ばかりながめて居る處の心は素直のものだ、唯今其通りゐやんとゐて居る心を、高天ケ原とも太神宮とも名付る、今の心は極樂の門先だほどに、取はなさぬようにするがよい、先坊様達ちにもちんぷんかんの斷ゐして、飯あてでふだ、そうせねば大勢の坊主共か、ひだるがつて腹を立るわい、其咄しの中て鹽梅のよい、口にあいそうな處が有ゐは在家の者にもちつと宛は振舞べい、尻は痛くとも辛抱ゐて御座れ、そうそる尻から佛になる、

坊様達よく聞けよ、れらが咄しをあて事をそるなよ、三五の十八皆達ふぞよ今時の出來合坊主は、人に寄て法に寄らぬ、若へ衆はまだしもだが、どゝろはげだ老僧めが、喰ふてはたれく、くそたれる計りが坊主では有まい、にがくしひとで御座る、今の通りの形ちかはねでは、佛法は地に落て仕舞ふわへ、根生玉をしやん持て、座禪して大太刀を拔て打掛られて見よ腕かぎり切込ねは手柄は出來ぬ、やくにも立ぬあの公案はかふた、達磨が

どふ言ふた、のと隣の寶ら斗りかぞへて居る、釋迦も阿彌陀も昔ゐ斷しだ、色々のむだ言をぬかさぎ共、命を掛けて骨を折れ、人斗りあてをにゐて居て、寐たいように寐て、喰ひたへように喰らへ夏ぐその炙へるようにぐぎり〳〵ゐて居ては、濟み申さぬぞよ、又座禪をそれば向斗り見て居る故、百年をわつて居ても埒か明ぬ、彌陀觀音も向ふにわなへ神も佛も諸天善神も、腹の中に具足して居るわへ、何の其人の腹を借るではなく、手前の腹の中を見るに

人に遠慮はいらね、在家の衆もそうで御座る、念佛でも題目でも、腹の中に向て申し込め、腹一はいになると、光明が輝くぞよ、彌陀も觀音も地藏も腹の中に持合ゐて有るけれど、大信心がなへと理木になるわへ、金銀財寶のいるをでもなし仕事しながら寐ても起ても立にも居るにも、素是我は何物ぞ何國より來て何處へ行く、如何〳〵と疑へ自身持合の大悲如來を見出せ、在家の者は、原の和尚が腹の中の物を見だせと言はゐやるが、ゐらが腹の中に

は今朝喰ふた朝飯の外には何もなへと思ふて居るぞよ、そうでなへ、腹の中の眞向佛は僧俗共に一つ宛は持て居るぞよ、時に六兵衛をへ、れはんをへ是れぞうだ、此をへと返事をる者は何者であろうぞ坊様達か座禪して骨を折るも、俗は念佛題目唱ふるも、此のをへと返事をる者を、見出さんためのまおなへだ、此をへと言ふやつに名附て如意寶珠とも觀音とも彌陀佛とも高天ヶ原とも、又は本來無一物とも神とも佛とも名附る、是を見出をは何よりやをへをなれども、本心知らぬ坊主の知るをでなへ、骨折次第に坊主の俗の男の女のと、差別なしにぐわりと知れる寶珠だ、我腹の中の寶珠を見出を時は、毎日毎夜彌陀にも觀音にも相見をるだ、彌陀と言ふも觀音と言ふも、たわへのなへものだよ、坊主でも俗でも生れし時名を付て生れし者は獨りもなへとうぞ骨を折て世界にあらゆる名の附た程の者を、かみこなおてのんてみよ、本來虚空なく我もなく本來もなく何もなへと言ひは、又ある是

は噺をはなへ、是わはや片手の聲を眞實に聞得た者でなければ行き申さぬ迷の悟りの地獄の極樂のと、口では說けと覺束なへをて御座るぞ、昔は鬼か人を喰ふた、今では坊主が喰ふぞめつたに坊主もあてにはならぬ、在家の衆も手前〳〵の身仕舞ををるがよへ、たらが隱居の時分は、坊主も大分に骨を折た、夫て人の爲になる坊主も出來た、今では骨を折れ〳〵と取揚姿〻が腰を抱くように、やれきばれ〳〵とせへても、得うまぬだ、大勢の中故に產む者もあれど四合五勺の時分にやりこんだよふな、やせこけた餓鬼斗りひり出を故、人を說得をるをが出來ぬ、諸宗は知らぎ禪宗では佛祖四十九年大骨折られて何せられた、皆こなた衆の爲め衆生の爲めに骨を折たものだ、依て出る息き引息き油斷はならぬ、出家でも在家でも吹出た息か引込ぬ時は、くたばつて仕舞た、佛祖四十九年の說法も、唯今たらが此ように、三河萬歲を見るような、衣を着て油氣のない髭附で、世話ををるもどうぞして、此方衆を

かけんのよい居風呂へ入てやりたい斗りに、あゝのこゝふのと豆藏ほどゐやべつて世話をやくも、地獄がこわさ鬼がこわさ故ぢや、此地獄がなければ寺もいらぬ佛法もいらぬ、たらモ髪に三筋モ髪を生し、ゐたいををるだ、地獄がれそろしいばかりにれとなしくだまつて居るだ、在家の衆モ隨分れとなしくをるがよへぞ、頃日れらが處へ來て噺した者がある、若者には有うちにもせい、今は年寄が稼ぐけな惡ひをだ、表向は内々内々はどふだかれら

も知らないが、先在家の女房等は家内の世話も仕たり、子供の世話もしたり、朝から寐迄、毎日々々勞れるであろうに、思ひやりのなへ、我儘者妾の足掛の腰掛のと稼ぐけな、所は聞ぬが余所々々に有と言ふ丁だ、奇特な丁で御座る、在家の者は女房斗り守るがよへ、夫ははや女房がれとなしくだまつて居るもあり、又鬼になるもあり、何方も同しをだ、皆地獄の種物となるわへ、何でも有可き通りにそるがよへ是亭主等も能聞よ、れのが我儘をして女房か

やきかけると、男は七人迄御許しだとぬかをげな、聖人達ちも女房二人持たとは聞ぬわいそうしてれいて女房がちつと斗り、あつちこつちがあると、めつたに女房をしかるげな、扨又女房にもふたまを遺ふ者があるげな是甚だ悪へとだ、夫は天にたとへし物なれば、そうしたとはせぬがよい、然しれらがあまり搆ふにも及ばぬが、地獄の種を御を故世話をやくのだ互にちつと宛堪忍それは、家内に六ケ敷をも出來申さぬ、朝から晩まで笑ふて暮をだ、

さそれは家は繁昌をる道理、第一先祖へ孝行で先當時の兩親へ孝行となる、毎日々々言ふをたが若者も孝行せいよ、孝行慈悲仁義のないものは人ではないぞよ、親に孝行の心があれは佛神も麁末にはせぬものだ、夫故其日々々の渡世も大事にする心になる兎角坊主ても俗人でも遊んで居るとろくな事は出來申さぬ、盗みをるか火を附るか、様〻の悪事をする、親々達は腹中より善人にしようと言心はあれと、盗人や道落者には産附はせぬわい最

も因縁とは言ひながら、先子供の時から親の育が大事だ、余りかわゆがり過ぎてはやくにたゝぎになるぞよ、中には身腹分けた子供斗り大事にして、儘子などをむでくそる者がある大方は女だ、そうゆうてはそるなよ、手前の子よりも儘子を大事にそるがよい、そうそると自然と手前の子も栄ひて、悪ひてわなへ子供斗りでなへ、家來の下女下男出入の者にも目を掛て取らそがよへぞよ、主となり家來となり、同鍋の者を喰合ふと言ふは因縁か有故だ家來に眼を掛て取らそれは、奉公そる者も亦主人を大事にそるわい、主人が不便を掛て遣ふに不奉公をそる奴は、畜生も同前だ、主も家來も慈悲の心は大事、人たる者わ慈悲忠孝が有故、生物の丶旦那だ慈悲の心のなへものは畜生だ、人で無いと言證據は、あれあの犬を見よ、あいつらは、朝から晩迄おやらけまわつて遊ひ何ぞ傍へ魚の骨でも投げ出おて見よ、なき合かみ合かゝでも子でも、中々なめさせもせぬではなへか、其通り無慈悲な者だ、よつ

て慈悲心のなへ者は人ではなへと言ふた、在家の衆は、金銀でなければ、慈悲善根は出來ぬと思ふて居る者が有るが、そうデなへぞよ慈悲と言ふ者は、眼デモ出來る、口ても出來る手足デも出來る耳デモ出來るだ、先人に惡事あれはよきように取なをして、足に任せ手に任せ、眞實に世話をそれは夫程の善根だ、此慈悲善根をは余所にゐて人をそねみ中言を言ふて、中違へをさせあたりあふてわれる工みをするは、地獄の種おやせぬがよへ、たとへ念併申さぜに寺參りせぜに大事なへ程に孝行慈悲の心を持がよへ、其上デ寺へも宮へも勝手次第に參れ、親に不孝をゐたり無慈悲の心で神佛を拜ゐても、中々受る神佛はない拜んでも手前の勝手の時斗り見舞ては用は辨せぬてはなへか、常に正直正道な人は皆人々が打捨置かぜあゝのこうのと眞實に世話をゐてくれるでなへか、左それは正直慈悲の心程有難ひものはなへ、孝行慈悲の有難ひ證據には公儀より御はう美を被下デなへか今此のからい

世の中に大力だの碁が強ひの何か上手だの名人だのと言ふても、外の事では錢壹文も御褒美は被下ぬだ夫程慈悲孝行は有難へ者だ故、ちつとデも孝行慈悲善根の志ゐを起せと言ふのだ地頭は々々の慈悲があり、代官名主も其通り百性町人に情け掛るがよゐ、兎角我明へ水を引ぬがよう御座るぞよ、そうせぬと何様な高位デも、大家デも仕舞は屋敷に井戸斗り殘るぞよ、恐敷へ事で御座る恐敷へ々々へと、此方衆をれどかゐてをらか錢壹文貰ふ

と言ふでもなゐ生きても死んでも其罪はのかれぬ、依て眼玉の黑へ内に來世の支度をするがよい四國西國京大坂は島渡往來をするにも夫々の支度がいるでないか、增ゐて來世の支度は、永々のとなれは、大支度デ五日や十日では出來申さぬ今、息を引取場所に成ては乍恐天子様でも將軍様でも大名高家でも下々の者にても同ゐとだ、何様にはへ廻わても叶わぬ婆婆にある内は上み下ものわかちがあれと、鉄之棒を振廻時に成りては遠慮は無へぞ

よ、依て用心の網をひくを利根者と言ふ轉ろんでから杖を尋ねては間似合ぬ夫とも に勝手にせよれらが無理に進めはせぬれらが寺の門前に本家か有こゝに辻談議と言ふ本が有る、在家の衆も此本を調て讀がよへ、是は地獄の噺し斗り書出た物た、此本はれらが老漢が年寄て在家ゟ説法も大儀に成りた故、書出た坊様達か讀て在家の衆へ聞た本だ先是を讀て見るがよへ、何んの其婆〻か〻達の讀本だと思ふて居る、れらも若い時は、辻談議を讀を恥敷思ふたけれとも、此辻談議も三十年も骨を折らねは、しつかりとは知れ申さぬ程に、若い坊主も讀がよいぞよ、少し斗悟りの形を見出なた迚て見解を斷そな、あれは足高山これは箱根山だと言ふ所は骨折次第て慥に見得るしつかりと傍ゟ行きて、松か杉が幾本ある、寸尺迄見居はけた、悟りてなければ、やくに立ぬから、見解取置て悟らは、悟りに附て跡へ戻り々々骨折て見よ、此婆婆の夢をを見はした時は、海河に水が一滴もなし、山に土が一な

めもない、寺もないが我もなへ天地もない、又此時節に大骨を折れば、自由自在の大悟りをそるわへ、小刀細工の悟りでは行き申さぬ、此何んにも處が禪坊主の大關所た、此關所を眞直に通ると迷ひの悟りと言ふ、けちな物は無くなつて、三千世界ぐわらりぐわと大光明を輝かそだ、佛心宗は別にはなへ、毎〻眼を附て見よ、爰の所に至つては講釋はなへ、併祖の胸腹痛めた此關所を通らねは、禪坊主の男が立ぬぞよ紅ひ衣や紫の衣を百枚着ても此關所を通らぬ坊主等は、山田に立し案山子も同前破れ衣で、鼠のかぢりさしたような坊主でも、爰の所を合點それは、有難坊様たよ、そう言ふて六ケ敷へ事でもなし、然し唯は行かぬ寐たり起たりして居ては行き申さぬ、たとへ座禪をしても向斗り見て居ては行てなへ、何んでもれつだぬいで腕限り命限り、腹の中に向て如何〳〵と骨を折らねは利益がない、そこでは一夏勤ては休み、爰では一夏勤ては休む、中〻夫て行事ではないぞよ、寸の間も油斷

透間なく、大工が檻のあづま言ふ堅木に錐て穴をあけるに、ちつと斗り遺ては煙草を呑みちつとやらかしてわ、手が痛へと言ふて休んで見よ、めつたに穴があかぬ、もみさした錐先にあたゝまりの來た時分に、総身に力を入てもみこむ故、何様な堅へ木でも、心易く穴があくでなへか、麥米をつくも同おとだ十ばかり杵を當ては休み三十斗りやらりしては休みそると米がうるんでつけ兼る、禪坊主も其通り、尻にあたゝまりの來た時分に、鎭西八郎が

弓先も義經が太刀先も不恐切込め、花を見ては花に染みつき、美しひ物には心をとらかし向ふ斗り見て居てはそみ申さぬぞよ、悟りに坊主の悟り俗の悟女の悟りに二ッはなへ駿河國には俗に悟た者も大分有る、男斗りでなへ、女にも大悟りを引出した者が有、此方衆も一遍の念佛題目、朝念ん觀世音とも腹の中へ申込め、兎角腹にたまらねばやくに立ぬ、たらが今朝説き始めてから一時も立つべいが、此方衆の心は何國有る、男だとも女だとも比丘

透間なく、大工が檻のあづま言ふ堅木に錐て穴をあけるに、ちつと斗り遺ては煙草を呑みちつとやらかしてわ、手が痛へと言ふて休んで見よ、めつたに穴があかぬ、もみさした錐先にあたゝまりの來た時分に、總身に力を入てもみこむ故、何樣な堅へ木でも、心易く穴があくでなへか、麥米をつくも同おなじ十ばかり杵を當ては休み三十斗りやらりしては休みをると米がうるんでつけ兼る、禪坊主も其通り、尻にあたゝまりの來た時分に、鎭西八郎が

弓先も義經が太刀先も不恐切込め、花を見ては花に染みつき、美しひ物には心をとらかし向ふ斗り見て居てはをみ申さぬぞよ、悟りに坊主の悟り俗の悟女の悟りに二ッはなへ駁河國には俗に悟た者も大分有る、男斗りでなへ、女にも大悟りを引出した者が有、此方衆も一遍の念佛題目、朝念ん觀世音とも腹の中へ申込め、兎角腹にたまらねばやくに立ぬ、たら方衆の心は、何國有る、男だとも女だとも比丘が今朝說き始めてから一時も立つべいが、此

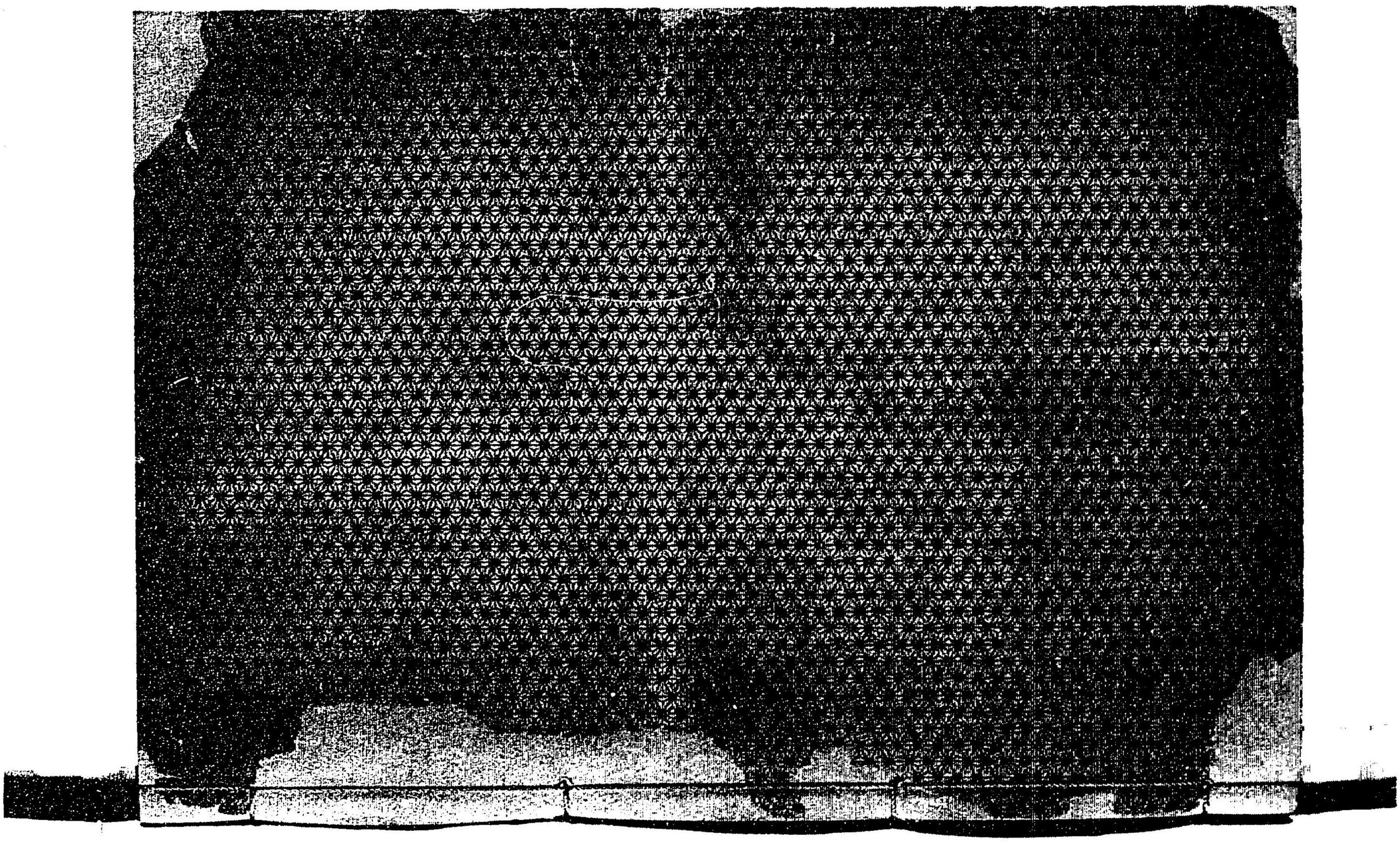
尼だとも坊主だとも、差別なく、誠に唯今の此方衆の腹の中は、きれいな者だ、れたいとものは、ないとも、にくいともかわゆいとも内外のなへ此方衆の腹の中は神とも佛とも名の附け様がなへわい、今に講座か終ると立騒く、れが草履をこゝに置たに、どいつが盗んでうせたの、わしがどうだのと、腹の中をよでをかける、門を出ると又逢ふ、内に戻れば又逢ふ、寐てから夜着蒲團の中ては亦〻大きに違ふだ、祖母達よく聞けよ、寺参りより戻ると、米櫃の蓋はなせ明け掛けて有、飯櫃の蓋はとうだとの、世話をやく、そこで嫁が氣を惡くをて言ひわげをする、又祖母は無いもせぬ齒をかまふとする、嫁はかまれまいとする亭主達は、親のひるきをするばづで母の肩を持つと、かゝ様のひるき斗りをると嫁が腹を立、又亭主もかゝがきげんがわるうては相談事の邪魔になろうかと、又〻かゝ肩を持、あゝのかふのと角究合が始まると今言ふた名付ようのなへ、結搆な腹の中之黄金佛を真黑にをて仕舞だ、依

て嫁は舅姑めに孝行をするがよい、惡ひ親程それけんを取て、大願心を發おて、どうぞ能き親に仕立るがよへ、扨又親達もよく聞けよ、親だと思ふて、あまり我儘を言なよ、老ては子に隨ふと言ふことがある、何にもせよ、能い加減におて鍵は息子に渡おて杓子は嫁に渡おて仕舞、生ぞうおになりはせぬ、夫とも貳百も生るあてがあらば勝手にせよ、いつ迄も世話をやいて居て、地獄種を積重ては、けちな所へ行くぞよ、地獄と言ひは此方衆は地の底にでも有樣に思ふて居るが、そうではなへぞよ、地獄と言ふ物は此方衆が、毎日々々拵るわい、あの者がどう言ふたの、此筋では濟まぬのと、人の惡事斗り見出おて、道理にくらき故利根な人の言ふ事は聞入ぜ、情をはるはよおにせよ閻魔大玉の前に淨波理の鏡と言ふ物が有ぞよ、情を張てあまり利生を得るとはなへものだ、でとばつて居ては濟申ぜぬぞよ、此博奕の切替が大事だ、此博奕の切替が悟りの眞中だ、在家の者がちつと斗り、蚤の頭をよきて割た程悟りのかざ

をかぎては坊主をせゝりたがる、是甚だ悪ひてだぞよ、今言ふ通坊主の悟りの俗の悟りの と二ッはなへ、坊主の俗のと、あたまにかまふな、正月でも大事なへほどに、れらは死んでぞこへ行くと、心にたへづ尋て見よ、年禮に歩行て目出度とは、目が出ると言ふぞなへか、一休が御用心〳〵と言ふて、京の町を歩行たわ、此目出度を見出せと言ふた、今日も大分參た、見た所が五六千人も、在家の衆が參詣ぢた、是が今年の中にも大分死ぬ來年は百人も千人も

死ぬる、五年十年廿年には皆死ぬるけれども、れらも死ぬだ、坊様達講座も今暫くだ油斷はならぬ、大會と言ふと、在家の衆が色〻の物を無理に持て來てくれる、ひだるいとがない、此節先りを出さへでいつの時に利益を得る、蚊張の中に横槍をつゝたように頭斗りふら〳〵と眠て居ては濟み申さぬぞよ、其身其儘くたはつて仕舞、在家の衆、れらもまちつと斷ぢもて聞せたへが、今日蕎麥振舞で行くだ、今朝から言ふ通り、唯々心を素直にぢて念佛ても

題目でも腹の中に向て申込め年寄は年寄のあるべき通り此あるべきとをりの七字を壁に書て張て置け、七日説法屁一ッにもならぬ先今日是きり

遂翁説法終り

明治十八年四月廿一日版權免許
同　年　九　月　出　版
定價金八錢
長野縣平民
編輯兼出版人　土屋善兵衛
信濃國北佐久郡小諸町第百五拾番地
長野縣下　小諸活版所印行